

【研究ノート】

# 国際理解に係る実践研究 ～ 南アフリカでの体験をとおして ～

本多辰之

## Practice Study on the international understanding ～ By the experience in South Africa ～

by

Tatsuyuki HONDA

【キーワード】 教育, 国際理解, 黒人居住区, 南アフリカ, アパルトヘイト

【要旨】

本論は、国際教育における異国文化の研究に係る「ひと・もの・こと」の変容について歴史的背景をもとに、人権と教育という視点から整理することとした。

そこで、まず筆者が在住していた南アフリカ共和国の自然的・社会的環境を中心に、外務省や文部科学省からの情報、国際情報誌や専門誌、さらには学会等における発行誌等を参考に、その動向を調べた。このことによって、我が国の国際理解に対する多面的な研究や業績、さらには地球規模での自然的・社会的環境問題が見え隠れしていることが伺える。しかしながら、その現状を探り、検証する上での情報収集・整理・活用という一連の情報応用活動をおこなうには、時間的な面や費用面等から多大なコストが伴うという現実は避けることができない。

そこで、文部科学省が提唱している国際教育の合理的且つ有効的な研究の在り方はどのようなものかという視点から、研究を深めていきたいと考えているところである。

---

受理日：平成27年11月30日

純真短期大学こども学科 准教授

## ○ はじめに

我が国の国際教育は1991（平成3）年1月、東京都において国際理解教育としての設立総会をもって誕生した。そこでは「21世紀を目前に控え、東西対立の冷戦構造が緩んで世界は新しい秩序をもとめて模索をはじめた。」と記している。また「物、金、情報そして人間が国境を越えて活発に交流し合い、各国、国民の相互依存関係がますます強まってきた。」とも述べている。（国際理解教育学会総会より）

しかしながら、民族、伝統、文化、言語等の違いによる国家間の対立構造は一向に改善されることなく、むしろ誤解、摩擦などが日常化するとともに複雑化していく現状にある。これらを解決していくには、国民の相互理解とそのための相互交流が重要であろうと思われる。このことは、明日を待たない地球規模での環境問題（自然環境・社会環境）の一部として重要な課題であろうと考える。

さて、国際理解教育は第二次世界大戦後、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が大きな推進役を果たしてきた。ユネスコ憲章の前文では、国際社会の相互理解の不足が戦争の原因であるとして、他国・他文化理解が重要性を示し「国際理解のための教育」（1947年～）に着手した。その後「世界市民のための教育」（1950～52年）「世界共同社会に生活するための教育」（1953～54年）「国際理解と国際協力のための教育」（1955年～）「国際理解と平和のための教育」（1960～70年）等々、多様な提唱をおこなった。そして、教育実践の場をユネスコ協同学校とすることで世界的な広がりを見せている。

その後、地球環境問題が深刻化した1970年代以後、相互依存関係や人類共通の課題の認識が強調され「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」（1974年ユネスコ「国際教育」勧告）が採択された。また、1990年代には、冷戦終結後に激化した民族紛争や大量の難民が発生した。そこで、平和・人権・民主主義のための教育が必要とされ、平和の文化における普遍的な価値・行動様式の育成をおこなう「平和・人権・民主主義のための教育に関する包括的行動計画」（1995年）が作成されるに至った。翌1996年には『学習；秘められた宝』（ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書）により、平和な地球社会の実現のための民主的参加や人間開発、生涯学習などの重要性が提唱されている。

以上のような観点から、国際理解教育に関しては標記上の違いはあるとしても、他国・他文化の理解や相互依存関係の理解、人権の尊重を基盤にして国際的に平和な社会を形成する国民をめざす教育とすることができるようである。つまり、国際教育は知識、技術、思考力、価値観、態度形成等に係る教育実践であるといえよう。

従って、教育の場においては、学校・家庭・地域社会のあらゆる機会活用に伴う連携と協力体制を整える必要があるものと思われる。

我が国が21世紀に向けて、世界の諸国民と平和的な共存をおこなうためには、人々の心に国際教育の重要性を訴えなければならないと考える。

筆者はここに、国際教育の研究と実践という立場から、諸国民との交流を通じて、その促進・発展に寄与することができれば考え、在留経験がある南アフリカ共和国の「ひと・もの・こと」という視点から本研究ノート「国際理解に係る実践研究」を述べるに至った。

## 1. 南アフリカにおける教育

教育における国際化とは、異文化にふれる活動をとおして、その文化を背景にもつ人々と共存できる人間の育成にあると考えられる。そのためには、文化の中核となる自国と対象国の言語教育を充実させるとともに、交流活動の活性化を図らなければならないものとする。

そこで、南アフリカにおける日本人学校と現地校の交流活動について、その取り組みを述べることにする。

### (1) 邦人の学校

南アフリカには「ヨハネスブルグ日本人学校」という歴史的な(古い)小中一貫教育に取り組んでいる学校が存在する。

教職員は、日本各地から召集された11名(現在は9名)の派遣教員と2名現地の英会話講師。さらに、11名の現地職員を含め総勢24名での人事構成がなされている。



(外務省ホームページから引用)



児童生徒に目を移すと、学年部として小学1年生～中学3年生まで九つの単一学級で編成されており、全校児童生徒数は60名に満たない小規模校である。

そこでは、年ごとに悪化する治安問題や不景気のおり(経済的な企業運営)を背景に、在駐企業の撤退や規模の縮小化などが進んでいる。伴って、日本人学校を去る児童生徒が多く見られるようになってきている。彼らは、全面が芝に覆われた緑鮮やかな広いグラウンドを走り回り、草木や色とりどりの花に囲まれた学校内の自然環境に心を和ませていた。

そんな癒された環境下にあっても、治安の悪さは避けることができない昨今である。

学校の周囲は高い塀で囲まれ、その上には8千ボルトの電流(エレクトリック・フェンス)が流れており、さらに、警備員による24時間の管理体制が布かれている。

余談ではあるが、ケニアにあるナイロビ日本人学校では学校周囲を二重のフェンスで取り巻き、その中に五頭のドーベルマン(狩猟犬)が放されている。

これが、アフリカにある日本人学校の現状である。

### (2) 日本人学校の教育

教育活動は、日本の教育課程に準拠した内容で実施されている。元来、海外に在住している子ども一人ひとりが、帰国後も無理なく日本の学校に馴染めるように、という趣旨から設立された学校である故、日本と同等・同様の教育課程が編成されている。

そこでは、少人数の学級であることや授業時間数の効果的な運用(現地の年間暦)から、特徴的な教育活動が展開されている。また、日本国内全土から集まった派遣教員が繰り広げる授業実践は、教員相互の文化や情報交換等を取り入れた特色化をめざすよう取り組んでいるところである。

職員研修という視点からは、学校の教育目標具現化という立場から「現地理解教育」を主題として、様々な場面で国際色あふれる教育実践活動に取り組んでいる。これは、何処の日本人学校にも共通したテーマのようであるが、現地理解という方法論をとおして、その延長線上にある平和な国際社会の実現をめざすものである。

具体的には「英会話学習の充実」というスローガンを掲げ、英会話講師による70分の能力別英会話を日々の教育活動に取り入れたり、毎週水曜日の朝の活動では「全校英会話」の時間を設定したりしている。また「コミュニケーション能力の向上」を合い言葉に、教職員全員で取り組む「関わり活動」にて本校の独自性をだすとともに、儀式的行事の際には児童生徒による英語スピーチを慣例化することで、英会話能力を高める一方

途としての有効性を検証しているところである。そして、校内における英語コミュニケーション能力に係る取り組みを実践の場と設定して、その評価の場を現地の学校に求めた。つまり、現地校との相互交流学習により、英会話という媒体をとおして「現地理解」に発展させようと考えた次第である。その活動の多くは、縦割グループによる小集団活動であり、自治的・実践的な意味での成長がみられる。また、その実践と評価が一体となる取り組みでもあるためか、学習意欲の向上という点では有効であったと感じる。

さて、筆者は複数学年の教科を担当したが、ここでは国語科と理科における学習内容と総合的な学習の時間とを関連付けた現地理解教育の実践を紹介することとする。

#### ① 具体的取組み：1（国際理解）

小学部四年生の国語科授業。

この学年は何事にでも興味を抱く、4名のギャングエイジが席を置いている。全てのことに意欲的な元気盛りの児童であるのは、日本の子どもたちと同様である。

ただし、異なる点を挙げるとするならば、物のありがたみや感謝の心などは日本の子どもたち以上に敏感のように感じられる。これは、仲間や遊ぶ場、買い物や散歩等々、全ての行動において、多くの規制やルールのもとに生活しなければならない在留邦人の定めなのかも知れない。裏を返すと日本という安全で満たされた国のよさを感じ取ることができるのである。南アフリカでの生活に不自由は感じないまでも、日本から離れて生活してみると物が溢れている日本という国を実感できる機会であり、教育者としては、それを意識させなければならないものとする。

#### 国語科 単元「ツバメのすむ町」

○「導入」学習として、南アフリカの鳥や鳥の巣のフィールドワーク

フィールドワークといっても治安上校外へ出向くことが難しく、子供たちと相談しながら校庭に飛来する鳥や樹木・校舎にある野鳥の巣などを観察することとした。

飛来する鳥の種類・巣の形・樹木と巣の種類の関係等を調査対象にしながら意欲的な調べ学習が展開された。文献調査も試みたが、言語の壁にぶつかり十分な理解が得られない部分が多かったため、鳥に詳しい現地の方をゲストティーチャーとして学級に招いた。これは、地域の人材登用による学習スタイルである。



そこでは、南アフリカにいる鳥の生態系を中心に学ぶとともに、自分たちの調査内容とすり合わせるという活動目標を設定した。また条件として「Q&Aは全て英語でおこなう」という条件付きの学習形態を仕組んだ。

その学びとしては、子どもの事前アンケート（興味深いこと）をもとに「鳥の生態や人のかかわりについて」という話し合い活動を核とした学習を仕組んだ。そして授業後には、お礼として子どもたちの作品である80羽の折鶴を贈呈された。

ここでは、国際理解という機能教育の一方途をコミュニケーション（英会話）に求めたが、この交流会によって南アフリカの野鳥に係る多くのことを学んだようである。また、現地の方とふれ合いながら話題を共有できたことは、大きな無形の財産であろうと感じた。



なお、事前の打ち合わせや連絡・調整等をおこなう教員は、全てを現地語でおこなうため、語学面での自主学習を要求される。

## ② 具体的取組：2（国際理解）

小学部六年生の理科授業。

基本的には、日本における学習内容に準拠しているが季節の逆転、動植物の植生や土壌の違いなどを勘案して指導計画を作成することが必要となる。そこでは、南アフリカにある身近なものを教材化していく中で、指導者自身が知らないことが多くあり、子ども以上に驚きを感じることもある。

驚嘆の一例として「松かさの大きさ」が挙げられる。日本のそれとは異なり掌ほどの大きさになるのである。

また「蟻の巣の大きさ」にも驚かされた。郊外へ出るとあらゆる場所に点在している。日本の蟻は地下に巣をつくるという既成概念があるが、ここでは地下だけでなく地上にも巣を造り上げていく。

なお、大きさは人間の背丈以上のものが大半である。

この地では「知りたい・調べたい」と思う事象が突然現れる。従って、些細な発見や驚きとそこから生まれる好奇心を育みながら、南アフリカの教材について探求していくことができれば、と感じた。



## （3）現地校の教育

日本人学校では学習指導要領に準拠した教育課程の編成・実施・評価をおこなっているが、その中に、学校独自の工夫を凝らした教材開発や教材づくり等の教材化を図っている。

この地には、現地校として IR グリフィス校が近くにあり、そこでも独自の教育活動に取り組んでいた。そこで、本学との交流会をとおして子ども相互は勿論のこと、教員相互・学校相互での交流を深めることで、教育活動の活性化・特色化をめざしているところである。

具体的には、運動会での「国際親善リレー」やバスケットボール大会・サッカー大会、また、KITE DAYでの「凧揚げ」等、多くの交流活動をおこなっている。

学校の様子としては、中庭の芝生の上でクラス全員が輪になってディスカッションをおこなう姿や、ランチボックスを手にして友達とともに様々な場所でパンやスナック、そしてフルーツ等を口にする風景が見受けられる。

なお、授業の終了は午後1時～2時。その後、夕方まではクラブ活動に参加する。

そんな現地校（小学1年生～中学3年生）の教育活動は次に示すとおりである。

### ① カリキュラム本“National Curriculum Statement”を基準とした教育計画

日本の学習指導要領にあたるものである。これをもとに、教育課程の編成や教科の授業計画が立案される。なお、計画段階で、各学校の特色を多く出したものに変更されていくというスタイルは、日本のそれと類似している。

教科は日本でいうところの、言語、数学、自然科学、社会科学、芸術・文化、道徳、経済・経営、技術の八教科で編成される。しかし、日本の教科内容とは相違点が多く、様々な分野の事象を含んだものになっているようである。

## ② 学校毎のオリジナルテーマ

各学校では、National Curriculum Statementにもとづいて、毎年1月から学習テーマを作成。交流校であるIRグリフィス校のテーマは、学年毎にまとめられており、各教科の学習内容一つ一つがこのテーマに組み込まれている。

例えば、Grade1（小学1年）には、13テーマが用意されており I am special /Me（自己紹介） Family（家族紹介） Personal Safety（健康管理） Pollution（環境汚染） Water（水資源）他、といったテーマ設定がなされている。

これらのテーマにそった学習内容が（年間39週のうち、1テーマに3週）国語・数学・道徳の教科の学習に含まれる。どのように年間の学習に組み込んでいくかは、各教員が選択権を持っており、学年・学級そして教員の独自性（特色化）がオリジナルとして出されている。

例：Grade 4以上の理科のテーマ

テーマは、日本語でいうところの「社会と私」「環境保全」「コミュニケーション」「技術開発と南アフリカの力」の4項目。これらを各教科の中に取り入れることとなる。

Grade 7の理科学習の内容で見ると「酸と塩基」という単元がある。そこに「社会と私」「コミュニケーション」というテーマを取り入れる。具体的には「煙草、薬物、エイズ」を学習内容とする。

これらは、日々の生活の中のものと密接な内容をもって進められていた。また現在、南アフリカで社会問題となっているものを学習教材に取り上げ、討議していくという授業形態がとられている。理科学習の中に文章表現力や道徳的価値の追求、さらに認め合う学習のあり方等が含まれており、多様な授業形態である。

これは、我々が認識している教科の枠を大きく越えた横断的なものとなっている。振り返ると、日本の学習指導要領にもある「横断的・総合的な学習」に迫ることを意味しており、それが円滑に機能しているようである。

このことは、筆者が抱いていた実験・観察を中心として学習展開を仕組むという「理科学習」のイメージが大きく崩された。つまり、理科的活動である

## ③ 分厚いファイルでの授業

IRグリフィス校の校長に教科書の利用について質問をしたところ「この学校の教員は教科書を利用せずに授業を進めている。」との回答を得た。

その理由として「教科書の内容はどんどん古くなっていく。教科書では、その時々新しいものを提供できない。」という返事が返ってきた。

その代わりに各々教員は、独自性のあるプリント・資料を詰め込んだとても分厚いファイル（日本の総合的な学習で用いるポートフォリオのようなもの）を持っている。その中から必要に応じて資料を抜粋するとともに、子どもたちに配布をして学習を進めているという。

Grade 6の「歯」について学習している授業

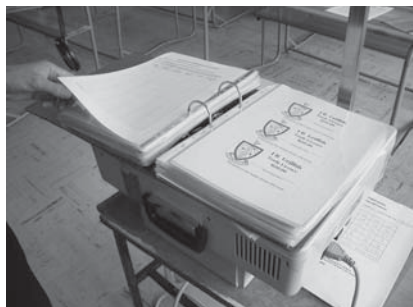
写真①は、ファイルを片手に授業を進めている。

写真②のように、子どもたちは自分のノートにプリントを貼り、授業に参加。

写真③は、理科室には、四人グループの机が8台。

※ 準備室は日本の設備に比べるとシンプルである。ただ、様々な動物の標本や

化石・鳥の巣などが多く見受けられるところは「流石、南アフリカ。」と、感心した。これらは、子どもの親がハンティングで仕留めたものも多いという。



写真①：教師のファイル



写真②：子どものノート



写真③：小集団活動

現地校では、学校全体のテーマを決定し、それを各教科学習に組み込んで授業が計画されていくという流れが大まかに理解できた。このことは、日本における横断的・総合的な学習の編成上、参考になる面白いシステムであると感じた。

National Curriculum Statementの理科の分野を見てみると、学習の目的は日本と大きな違いはない。しかし、授業計画や授業実践を観てみると、数種類のテーマを教科学習に仕組むことで、自然現象と南アフリカにおける人間活動や南アフリカの風土などがうまく重なり合った内容になっている。従って、理科という教科学習が、単に科学の知識を得るということだけではなく、自分たちが暮らす南アフリカの生活環境下での、ものの見方や考え方、さらには脚元から地球規模の環境へと眼を向ける一助になっているようである。

この地の学校教育を振り返ってみると、十分な教育を受けることができない生活環境下の子どもがいる。また、多民族・多宗教が混在する南アフリカならではの教育問題が存在することを新聞や外出先で見聞きすると、今後も多くの情報収集活動をとおして、さらなる現地理解を進めていきたいと感じるところである。

#### (4) 旧黒人居住区「ソウェト」の教育

ヨハネスブルグの南西にアパルトヘイト時代の黒人居住区「ソウェト」がある。

そこは東京の山手線の内側ほどの地域に、350万人から500万人近くの人々が生活している。

高速道路沿いから見えるスコッターキャンプ(不法地域)には、多くのブラック小屋が立ち並んでいるが、近年では南アフリカ政府の援助により建設されたレンガ造りの家(Pre-cast-House)が少しずつ増えている。なお、2010年に行われたサッカーワールドカップの初戦と決勝戦は、ここソウェトのFNBスタジアムで行われた。



##### ① ソウェトの公立学校

ソウェトの中心部にある Grade7, 8, 9 の生徒が通学している公立中学校がある。

狭い校内に対して、約 500 人の生徒がひしめき合っている。対して教員は 10 名程度であり、十分な教員数が確保できているとはいえない。また、政府からの補助もあるが、それだけでは満足な学校経営ができてないようである。

○ 政府からの支給額



政府からの補助である各公立学校への支給額は、児童生徒数によって配分されており、学校であれば一定の支給は受けている。しかし、その制度に目を移すと、学校運営を満足させるには不十分な額である。そこで、各公立学校では児童生徒の保護者による「父母の会」を組織し、学校への援助金を集めるのが一般的である。

A：ヨハネスブルグ市内の公立学校

授業料 1ヶ月約 600 ランド～800 ランド（約 5500 円～7200 円）

使 途 施設充実費用 教員給与

B：ヨハネスブルグ市内の私立学校

授業料 1ヶ月約 1600 ランド～1800 ランド（約 14400 円～16200 円）

使 途 施設充実費用 教員給与

C：ソウェトの学校

授業料 0

使 途 0

※ ソウェトでは、ほとんどの生徒がスコッターキャンプに住んでおり、経済的に授業料を納めることができない状況で勉強をしている。また、学校に「父母の会」もなく厳しい現状にある。ここに、教育面での地域格差があるものと考えられる。

この地の子どもたちには学習に対して意欲的であるが、学習面での設備は皆無に等しいという状況下にある。具体的には、次に述べるとおりである。

資金面から学校の施設は、建物からグラウンド、さらには教材・教具など、全てのが不十分であった。校舎内にある約 10 教室の中には倉庫を改造したような（壁がシャッターになっている）間取りもみられる。

理科の授業が行われる教室を例に挙げると、暗い教室内にある備品は、生徒用グループ机及び椅子、教卓、ロッカー1つ、理科関係のポスターが数枚である。また、数学や英語の教室には、何の掲示物も貼られておらず、一見すると何を学習するための教室なのか分からない教室環境である。なお、コンピュータ室、美術室、技術室、家庭室等の特別教室は存在しない。

対して市内公立学校には、日本同様の各教室があり、同程度の備品が揃っている。



ソウェトの学校（理科室）



市内の学校（理科室）

○ 中庭

市内の公立中学校と比較してみたとき、とても印象的であったのが中庭だった。

市内の学校では、教師と生徒が芝生で輪になり授業（話し合い活動）をおこなう光景が見られる。しかし、ソウェトの学校の中庭は、荒れた砂地で、遊具施設もなく、生徒がゆっくりと休み時間を楽しむといった姿は見られなかった。

○ 売店

南アフリカの学校では、10 時ごろになると、間食の時間がある。



各自で、スナック、フルーツ、ジュースなどを自宅から持ってくる。また、校内には立派な売店があり、ジュース類、パン類といったものが購入できる。

一方、ソウエトの学校にも間食の時間は同様だが、豆類、コーン類といった素朴な食べ物が売られており、生徒たちは思い思いに購入していた。



ソウエトの学校（売店）



市内の学校（売店）

## ○ 教材・教具

### ア 授業（教員）

数学・英語・理科の授業を参観したが、どの教員も何も持たずに教室で授業をおこなう。数学では、古い教科書を1冊手にして板書をおこない、時々生徒に問いかけることで理解度を確認しながら授業を進めていた。

一方、市内の公立学校の教員は、前述したように、自分の教科のファイルを作成し、それを基にして充実した授業をおこなっている。

### イ 授業（生徒）

生徒は狭い教室に入り、比較的窮屈な状態で着席していた。40名～50名程度の生徒のうち、ノートを持っている生徒は数名である。その他の生徒は、何も持っていない。生徒用の教科書や資料等はなく、ただ、黒板を眺めているだけの授業風景であった。

しかし、生徒の手遊びや私語などは一切なく、先生の顔を見て話を聞いている姿が印象的であった。

## ○ 交流

生徒たちへ、日本文化として「書道」を紹介した。

筆を使って書く姿を見て「まるでドローイング（絵を描く）のようだ。」と、驚きの様子であった。本人の名前を書いてプレゼントすると、とても喜んでいた。

その他にも、食事を取る時の様子や言葉について、さらには、数の数え方など、日本文化について多くの質問を耳にした。その中で、次の質問が印象的であった。

「日本語で「お母さん、何か食べさせて。」とは、どう言うのですか。」

「日本でエイズ患者は何人くらいいますか。」

「日本には言語はいくつありますか。」

「日本の **President** は誰ですか。」

市内とソウエトの公立学校の両校で見ることができたのは、子どもたちの笑顔である。しかし、その子どもたちに与えられる教育の格差は大きなものであった。

また、子どもたちからもらった質問内容から察すると

「毎日、食事を取ることの不自由さ。」

「エイズ問題に対する関心もしくは不安。」

「多文化（言語）の存在する社会で生きていく中で抱える悩み。」  
 「子どもたちにとってのネルソン・マンデラという人物の偉大さ。」等々…  
 子どもたちの心の部分を少し覗けた気がする。

上述のような現状は一例に過ぎないが、今後、政府の活動内容を調べるとともに、さまざまな教員や生徒との出会いを大切にして、より南アフリカにおける教育の現状を把握できればと考えている。

## 2. 生活

高層ビルの立ち並ぶヨハネスブルグ中心部から車でおよそ20分のところに、南アフリカ最大の黒人居住区「ソウェト」がある。（1－（4）で述べた街である）

1976年、小・中・高校生のアパルトヘイトに対する1万人デモに警察は銃を向け、約300人の死者を出した。（ソウェト蜂起）

この地では、1991年アパルトヘイト完全廃止までに、多数の運動が行われ、多くの犠牲者を出した。今では、そのような歴史を伝える博物館やマンデラ元大統領の生家が観光ツアーにも組まれるようになっている。しかしながら、他の地域とは全く違う雰囲気を漂わせており、まさに「アフリカ」を感じさせるところである。

### （1）街中

近年、ソウェトの中には立派な住宅も見られるようになってきているが、地域によっては「スコッターキャンプ」（資料①）と呼ばれる場所が点在している。

そこには、多くのバラック小屋（資料②）が立ち並び、人々がひしめき合いながら住んでいる。家の中は小さく、古いストーブ（調理用コンロ）とベッドが必需品であり、質素な部屋全体は6畳もないような広さである。（資料③）また、電気は無く、車のバッテリーを使ってライトを点灯させたり、ラジオを聞いたりしている家庭もみられた。



①



②



③

### （2）人々

ソウェトの町へ入ると、邦人が住む周辺の様子とは違う雰囲気を感じ取ることができる。スコッターキャンプには、ボロボロの服を着て、靴を履いていない人も多数いる。

しかし、人々の微笑みと鋭い眼球からは力いっぱい生きていく人間としての温かみを感じるのは不思議である。

この地は、日本でいう「自治会」がしっかりとしており、「自分たちの町は自分たちで守る。」という意識が高いという。そのためか、広場で会議をおこなう姿が多く見受けられ、現在の日本がめざす「地域に根ざすコミュニティセンター」のようである。

また、週末になると、さまざまな場所から人々が集まり、其々の楽しみ方をしている。

どこからともなく、子どもや若者が集まり、ガンブーツダンス（写真⑤）や合唱をはじめている。彼らに尋ねると「これらをおこなうことによって「心」で語り合う。」という説明があった。

休日で閉校している学校の校舎内では、コーラス部の練習（写真⑥）が長時間にわた

っておこなわれていた。このグループは、日本へも招待された経験をもつほどの実力を  
もった人々の集団である。これらには、NGO（非政府組織）が関わっており、若者たち  
を集めていろいろな場所で様々な活動をおこなうことにより、犯罪防止への効果をねら  
っていると耳にした。

アパートヘイト時代、捜査の手から逃れながらの娯楽の場となっていた建物がある。

外見は普通の住宅でありながら、中へ入ると何もない広いスペースがあり、明かり窓  
もないガレージのようである。現在ではそれを改造して酒場（写真⑦）としている。



⑤



⑥



⑦

### （３）学校

前述にある学校は、不定期ながらも交流している公立の学校であるが、それ以外の学  
校を訪ねると、また異なる側面を目にすることができる。

教室（写真⑧）は薄暗く、汚れた壁に割れたガラス。

穴の開いた黒板に簡単な長机と椅子。掲示物などはほとんどみられない。また、入口に  
はバーグラバー（鉄格子）があり、校舎の外側の壁（写真⑨）一面にはエイズ撲滅の  
絵が大きく描かれている。

赤茶けたでこぼこのグラウンド（写真⑩）。散乱する小石やゴミ等々。

休日であるため、生徒たちの姿を見ることができなかったが、教育の水準には疑問が  
残った。

ただ、校舎の様子から感じとられることは、アパートヘイトの時代から確実に抜け  
出せていないということであろう。



⑧



⑨



⑩

### 3. アパートヘイト

南アフリカは、もともと狩猟民族サン族・コイ族の居住地であった。

1800年代から1900年代にかけて多くの争い（ボーア戦争）を繰り返しながらオランダ人（ボ  
ーア人）とイギリス人が広範囲（全土）を開拓していく。

1961年、南アフリカ共和国が成立し、ボーア系白人政党「国民党」の政権の下で、人種  
隔離政策「アパートヘイト」が創り出された。

「Apartheid」とは、もともと「別々にすること」を意味する。「白人至上主義を基に異人  
種はそれぞれ別の世界を造り、互いに関わりあわないようにしたほうがよい」という考え  
をもとに多くの法律が制定され、後に、この政策が支配力を強めていくこととなる。

主な法律は以下のとおり。

○The Mixed Marriages Act：異人種同士の結婚を許可しない。

- The Group Areas Act：異人種が同じ地域に住むことを許可しない。
- The Separate Amenities Act：異人種は異なる施設を利用しなければならない。  
(例：レストラン、映画館、学校、バス、電車の車両、ビルのエレベーター、ベンチ 等)

1959年にはバンツー自治促進法が定められ、各部族に政治的権利を与えることとした。それは、国が定めた黒人居住地区「バンツースタン」を黒人の自治地域に限定した法律である。しかし、その背景には総人口70%にあたるアフリカ人を国土13%の荒れた土地へ押し込めるという計画があった。その後も多くの法律を制定することで黒人を締めつけ、合法的な人種差別を推進していった。この政策は1994年まで続くこととなる。

また、教育面に関する制限も数多く含まれており、政府が黒人教育を大きく抑制したという事実がある。

#### (1) The Bantu Education Act によって作りだされた教育政策

その昔、子供たち全てへの義務教育は保障されておらず、教育の場としては宣教師による学校や地域に対する独自の仮設学校が主流であった。そのような中、政府は強硬な教育制度を構築していくことになる。

1953年に” The Bantu Education Act” という法律を制定した。

この法律によって「英語に代わり、アフリカーンス（オランダ系白人言語）で教育がおこなわれるべきである」とした。そのため、黒人の子どもたちには白人の学校とは異なる時間割が与えられた。その後、黒人の教育は教育省(Department of Education)の管轄から外され、黒人事情省(Department of Native Affair)の管轄とされた。また、一般教養を備えもった教員は教育省の管轄に置き、黒人の学校に関与することをできなくした。

1953年から1963年にかけて、黒人の子どもたちが利用できる学校数が増加する一方、これらの多くは「ホームランド（黒人居住区）」に位置していたため、出稼ぎ労働者である多くの親は、子どもを自分の故郷（ホームランド）へ送った。

その親たちにとっての大きな問題は、子どもと離れ離れになってしまうことに加え、その政策が、故意に黒人の進出や野望を制限したものであることにあった。

政府は、この法律をもとにして黒人の子どもたちをホームランドへ定住させるとともに、低レベルの教育を受けさせ、社会的地位も底辺であり続けるように計画していった。

黒人の時間割には、工業・科学・生物といった科目は存在せず、少時間の数学・音楽・ガーデニング・家庭・英語・アフリカーンス（白人の言語）・歴史{アフリカーナー（オランダ系白人）に重要な内容を含む偏ったもの}などが組み込まれていた。

#### (2) 意図的な政府の政策

1959年に制定された” The Extension of University Act” によって、政府は白人の創った大学には黒人が入学できないようにして、ホームランドに大学（黒人専用）の設立を許可した。しかし、そこでは十分な教員の数が確保されないばかりか、満足のいく施設及び資金等が保障されず、結果として設立不可能な状況に追いやられることとなる。

つまり、政府は黒人の子どもたちを社会において永久に下位の地位に追いやろうと考えたのである。そして、能力ある者もそれを活かせず、政策に敗れていったのである。

その政策の根底には、白人たちは能力ある黒人に自分たちの生活や財産を奪われるのを恐れていたからであるとも伝え聞く。

これらの内容に対する不満が膨らみ、ソウェト蜂起へとつながっていった。

#### (3) 教員の質



教員の給与は生活最低賃金を保障され、不十分でありながらも資格を所有している者は雇用された。

1954年、教育大臣は議会において「平等を信じる人々は、土着の者（黒人）にとって望ましい教員ではない。」と述べた。

翌1955年「教育者が国民の意見を表現することを禁ずる法律」が制定された。違反する教員は解雇された。従って、多くの教員は、雇用され続けるために、政府に逆らわずに教えることを選んだのである。結果として、彼らは、最早めざすものが何なのかが分からない状況となり児童生徒たちをうまく指導することができなくなっていった。また、警察による教育者の家宅捜査は日常茶飯事であり、教育に役立つであろうと思われる資料は全て破棄された。なお、捜査の犠牲となった者の中には、教育界のみならず国家のリーダー的立場の者もいた。さらに、1980年代、一部の高等学校教員の中には、満身に大学を卒業していない者が多く存在しており、体罰や酷使がまかりとおるような（無責任で無能な教員が多く存在する）教育現場であった。

#### （4）ソウェト蜂起

“The Bantu Education Act” には、次のような内容も含まれていた。「数学や科学を含んだ学校のカリキュラムの半分が、これからはアフリカーンスの言語（オランダ系白人の言語）のみを使って教育される。」それ故、教員は、彼ら自身が話せず、生徒も理解できない言語で教えることになった。

1976年6月16日、The South African Students Movement(SASM)という団体の学生や生徒たちは、デモを企画した。そして、多くの若者がソウェト内（黒人のタウンシップ）の各学校からオーランドスタジアムへ平和的に行進していた。その中には、高校生に混じって中学生や小学生の小さな子どもたちも参加していた。

彼らの学校では、自分たちの母国語ではなく、アフリカーンスによって学ばなければならないことに加え、どの教室も飽和状態の生徒数であるため、十分な教育が受けられない現状であった。さらに、学費の負担なども重ね合わせて反政府感情が膨らみ、大きな抗議の内容となっていた。この運動を「ソウェト蜂起」と呼んでいる。

対する政府側（警察）は、集結した子どもたちを撃ち（100人以上が殺された）、多くの血が流れた。

これを機に暴動が南アフリカ全土に広がり、（1ヶ月で1000人以上が殺害）多くの若い命が失われた。

#### （5）南アフリカの休日 6月16日

現在、6月16日は国民の休日「Youth Day」となっている。それは「南アフリカ歴史上、最大のつらい事実を忘れてはならない。犠牲となった多くの若い命が奪われたことを忘れてはならない。その為に、今一度、ふり返る日だ。」とされている。

現場となったソウェトには、当時最初に殺された生徒であるヘクター・ピーターソンを惜しみ、「ヘクター・ピーターソン・ミュージアム」が

建てられている。また、周辺には記念碑が立ち並んでいる。

筆者がミュージアムを訪ねた際、ヘクター・ピーターソンの姉と会うことができた。彼女は、”It was sad but my brother did not die in.” という言葉で自分の気持ちを伝えてくれた。



記念碑



ヘクター・ピーターソン兄弟

## ○ おわりに

南アフリカはアパルトヘイトから抜け出して、節目となる20年目を迎えている。

また、その後、ラグビーワールドカップでの優勝やサッカーワールドカップの開催、オリンピックでの活躍等々、国は活気づいているようである。そんな発展に伴って、国の通貨「南アフリカランド」は強くなり、高速道路には高級車が走っている。

しかし、視点を変えると、街中の白タク（八人乗りのワゴン車）に15人～20人の乗客がひしめき合っている。

自家用車にて交差点で止まれば、ホームレスが恵みを要求してくる。

豪邸が立ち並んでいる地域があれば、ソウエトで見たようなスコッターキャンプで生活している人々がいる。というように「ひと・もの・こと」の変容は緩やかである。

現地の方にアパルトヘイトに対する意識を尋ねてみると「多くの白人は、アパルトヘイト政策に対して、謝罪の念を抱いているが、全員がその気持ちであるわけではない。」「皮膚の色は当然であるが、鉛筆を髪の毛に挟んでそれが落ちるか落ちないかで、はっきりと人種分けがなされていたのですから。」との返答が戻ってきた。

時は流れ、黒人政権に代わるとともに政策も変化してきた。そして、現地校では白人の子どもも黒人も子どもも授業の中で、アパルトヘイトを学習している。

しかし、その歴史の中に生きてきた大人たちの差別・被差別という意識が改善されない限り、南アフリカの教育の機会均等というのは、まだ先のように感じられる。

このことは、南アフリカという一国における問題に留まるのではなく、我が国は勿論、全世界での共通課題であり論議していく内容だと思われる。そして、それらの問題に対する基礎・基本を身につけさせる取り組みが教育の場であろうと考える。

今後も多くの国や地域に対して、思い描いたイメージと現実の違いを確かめながら、国際理解教育を推進することで、明日を担う子どもたちにかかわりたいものとする。